

江戸—明治時代の おうち時間の過ごし方



コロナ禍により、自宅で過ごす時間が多くなり、時間の使い方を見直された方もいらっしゃるのではないのでしょうか？

今回は、江戸時代・明治時代に室内で人々に楽しまれていた趣味に関する和書とともに、長州志士たちの趣味やそのエピソードを紹介します。志士たちの意外な一面を垣間見る事が出来ます。

《展示資料》

| | | |
|------------|---|---|
| <p>料理</p> | <p style="text-align: center;">せいようりょうりつう 『西洋料理通』</p> <p style="text-align: center;">かながき ろぶん 著 仮名垣 魯文 著</p> <p style="text-align: center;">かわなべ きょうさい 画 河鍋 暁斎 画</p> <p>明治5年(1872)刊行 2冊</p> | <p>明治時代の西洋料理書。横浜に居留していたイギリス人が日本の傭人に料理を命ずる時の手控え帖を仮名垣が手に入れ、これを種本として書いたもの。スープは吸い物、キンコンフルは胡瓜と訳しているが、ポートル(バターのこと)は訳せないとして原語のままである。スープの作り方から始まって、魚料理、肉料理、野菜料理、菓子の作り方まで、110項目にわたって料理法が記載されている。</p> <p>参考資料：『日本大百科全書』</p> |
| <p>茶の湯</p> | <p style="text-align: center;">せいわんちゃかいずろく 『青湾茶會圖録』</p> <p style="text-align: center;">たのむら ちよくにゅう 著 田能村 直入 著</p> <p>文久3年(1863)刊行 3冊</p> | <p>煎茶の祖・高遊外売茶翁(こうゆうがい ばいさおう)の百年忌を記念して文久2年(1862)4月に開催された「青湾茶会」と、同年7月の「後青湾茶会」の図録である。大阪の青湾(網島)で開かれ、来客約1200人におよぶ大茶会であった。席の挿図、席名、茗主の名、道具の目録が記され、この後に刊行された多くの煎茶会図録は、本書に大きな影響を受けている。参考資料：『日本庶民文化資料集成』</p> |
| <p>骨董品</p> | <p style="text-align: center;">ここんわかんばんぼうぜんしよ 『古今和漢万宝全書』</p> <p style="text-align: center;">かしわらや せいえもん ほか編 柏原屋 清右衛門ほか編</p> <p>明和7年(1770)刊行 13巻13冊</p> | <p>日本、中国の印章、画家伝、墨跡、古筆、手鑑、名物茶入、道具、古銭、彫物などを集成した骨董の大百科事典。元禄7年(1694)に上梓されて以来たびたび版を重ねた。当時の書画に関する一般知識のあり方を知ることができ、江戸時代における美術全般の書として貴重なものとなっている。</p> <p>参考資料：『日本大百科全書(ニッポニカ)』『文化遺産データベース』</p> |
| <p>生け花</p> | <p style="text-align: center;">りっかたいぜん 『立花大全』</p> <p style="text-align: center;">じゅういちや たうえもん 著 十一屋 太右衛門 著</p> <p>天和3年(1683)刊行 5巻5冊</p> | <p>生け花のなかの立花の啓蒙的な伝書。『古今立花大全』ともいう。著者は2代池坊専好の弟子の十一屋太右衛門。専好によって大成された模範的な立花様式の普及をめざして、はじめて立花と「砂の物」の技法を、系統的に理論づけたものである。また立花を「たてはな」といわず「りっか」と称したのも、本書がはじめてである。参考資料：『世界大百科事典』</p> |

| | | |
|----|--|---|
| 書道 | <p>さんたいせん じ ぶん 『三体千字文』</p> <p>いちかわ べいあん 市河 米庵 著</p> <p>文化 14 年(1817) 刊行</p> | 江戸時代後期の書家で、巻菱湖(まき りょうこ)・貫名海屋(ぬきな かいおく)と並んで「幕末の三筆」の一人とされる市川米庵による作品。他の著書に『米家書訣(べいかしよけつ)』、『米庵墨談(べいあんぼくだん)』、『五体墨場必携(ごたいぼくじょうひっけい)』などがあり、今もなお手本として用いられ続けている。参考資料：『国史大辞典』 |
| 囲碁 | <p>いしだてなげ ご こくぎかんこう 『石立擲碁 國技觀光』</p> <p>ほんいんぼう じょうわ 本因坊 文和 著</p> <p>文政 9 年(1826) 刊行 4 巻 4 冊</p> | 初問 1 巻の中盤までは四子から先までの布石を講義し、続けて 4 巻まで丈和個人の 73 局を集めた打ち碁集になっている。囲碁を始めて習う人のテキストとして著された。本因坊文和(1818~?)は、12 代日本因坊を襲名し、碁界の最高権威者 碁所(幕府役職)を務めた。参考資料：『丈和 日本囲碁大系』 |
| 作文 | <p>さくぶんしよもん 『作文初問』</p> <p>やまがた しゅうなん 山県 周南 著</p> <p>宝暦 5 年(1755) 刊行 1 冊</p> | 文章を作るには、主題を決め、その主題を効果的に表現するために構想を立て、作った文章を再度見直しすることを説いている。山県周南(1678~1752)は、荻生徂徠(おぎゅう そらい)に学び、明倫館の創設に尽くし明倫館 2 代目学頭として尽力した。参考資料：『山井崑崙・山県周南 叢書日本の思想家 18』 |
| 謡曲 | <p>うたいのえほん 『謡曲画誌』</p> <p>なかむら さんきんし 中村 三近子 編</p> <p>もりに 橘 守国 画</p> <p>享保 20 年(1735) 刊行 1 冊</p> | 謡曲を読み物用として物語に仕立て直し、挿絵を添えた絵入り本。本来、謡本は稽古用の台本としての性格が強く、読み物として用いられることはほとんどなかったため、本書は画期的な出版物となった。各巻に 5 番ずつ、合わせて 50 番を収録する。当館所蔵の第 2 巻の曲目は、「難波(なにわ)」、「兼平(かねひら)」、「千手(せんじゅ)」、「鉄輪(かなわ)」、「船弁慶(ふなべんけい)」。 参考資料：国立公文書館報『北の丸』第 49 号 |

《長州藩士たちの趣味》

- 井上 馨 …料理・茶の湯(盟友・伊藤博文の好物は「井上式沢庵(たくあん)」だった。)
- 大村 益次郎…骨董品蒐集(一番の楽しみは掛け軸などの軸物だった。)
- 木戸 孝允 …西洋品蒐集(木戸孝允は新しい物好きで、特に時計を好んだ。)
- 来原 良蔵 …西洋太鼓(安政 4 年相模国へ警備に赴き幕臣から西洋銃陣を学んだ。)
- 曾根 荒助 …菊栽培(菊好きが高じて、菊栽培を奨励する「秋香会」を立ち上げた。)
- 野村 素助 …書道(「素軒(そけん)」の号を持つ書家として知られる。)
- 三浦 梧楼 …囲碁(自らも「筑碁会」という囲碁会を主催した。)
- 山尾 庸三 …金魚(退官後は文墨を楽しみ、特に金魚を愛した。)
- 山県 有朋 …謡曲(馬術や槍、舞に和歌など多趣味で知られた山縣有朋の趣味の一つが謡曲。)

こちらの展示では、萩図書館所蔵の和書を展示・紹介しています。日頃は書庫で大切に保管されている和書です。この機会に是非ご覧下さい。